
モンゴリーサを知っていますか

蝙蝠傘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モンゴリーサを知っていますか

【Nコード】

N0248F

【作者名】

蝙蝠傘

【あらすじ】

スペインのアンダルシア地方を流れるグアダルキビール川で出会ったカルメンとの思い出

きまぐれなその一

そうです。

ここはグラナダの丘の上にある林の中です。

なぜ私がここに居るかは聞かないでください。私にもわからないからです。

私の名前は金のハヤブサとでも名のっておきましょう。

わたり鳥が木の枝を海にうかべ羽根を休めるように 時に私も

この金色のつばさを休めたくなるといふわけです。

なんのことはありません。

この夕ぐれの中に私はたまたまいたのです。

つまり 。

林の中から前方の湖に、なげやりな目をむけてつつ立っているのは偶然のなせるわざなのです。

それは。

今はこの夕ぐれと一体になっている私は、明日にはもうここには立っていないということです。

ロスⅡガリヨスを知ってますか？
ほら。

グアダルキビール川のほとりにあった小さなタブラオです。

カルメンが一輪の赤いバラを口にして踊っていました。うるさいぐらいの靴音に、リオハのワインを一杯だけのんで、私はひとり立ちあがりました。

「どこへいくの」カルメンは悲しい目をむけて私にすがりつくように言いました。

「君のせいじゃないんだ、ギターの音が鳴りやまないうちはここに
いるよ」わたしは煙草に火をつけました。

風が吹きこんでドアが開いた。

私は煙草をくわえたままカルメンを振りはらうかのようにそこを
立ち去りました。

「うそつき！」涙をながすカルメンに私はもういちど言いました。

「君がわるいんじゃないんだ」

私の背なかでギターは鳴りつづけていたんだ。むせびなくように
ね。

私がそこにいたのも別になんでもないんです。それも偶然のたま
ものなのです。

ぼんやりと灯かりのついたタブラオの窓から、カルメンがせつな
い視線を私になげかけるのも、たんなる偶然のなせるわざというわ
けです。

だって。

私は今、ゆうぐれの林の中に立ってロングピースのけむりの中に
いるんですから。

そうです。

カルメンで思いました。

いつかグラナダの洞窟のタブラオで踊るんだって、その時は来て
くれるでしょうって。

私は煙草をふかしながら言いました。

「もちろんだとも」

「うそつきね」そのときカルメンは裸足でした。踊った赤い靴

は右手にぶら下げていました。

「いつとは約束できないがね」私はロングピースの白いけむりをはきだしながら言ったんです。

「煙草のけむりが目にしみるわ」そう言う私にその靴をなげつけました。

見てください。

これが私の胸にあたった赤い靴です。片方しかありませんけど。だからカルメンに赤い靴をもって行ってやるうとおもっているんです。

もつとも。

ロングピースのけむりが消えるころには、すっかり忘れてしまっているんでしょうけど。

酒場の娘、マリソル・ゴンザレスを知ってますか？

ほら。

マラガの港町のうらぶれた酒場の娘ですよ。

酒くさい部屋の窓から空をながめては、いつもため息をついていたあの娘です。

酒に酔ったマリソルは私の胸に顔うずめてこう言ったんだ。

「空にあまえて、風にあまえて、そして波にあまえて、太陽のひかりをあびながら、金色に輝いて飛びつづける一羽のハヤブサがいたら、それはあなただと思いたいわ」と、まるで歌をうたうようにね。

それからだよ。

ちよつと気どって金色のハヤブサなんていつてみたのは。別に名前なんかなくても私はへいきなんだけど、けっこう気にいつてたり

してるんだ。だから、金色のハヤブサってマリソルが名づけ親ってことになるな。

そういえば。

私が気がむいて出した一通のうすっぺらな英語の手紙を、読むことも出来ないのに、いつも宝もののように肌身はなさずもっているってさ。

ばかな娘だよ、あの娘は。

でもマリソルは知っているのだろうか？

このうす汚れた酒場の窓から見えるものも、ハヤブサがとんでいるものも、やはりおなじ空なんだということを。

そうだ。

今おもいだしたんだが、マリソルは歌が上手な娘だったよ。

すっかり疲れきった私がマリソルのうたを聞くとね、なぜかしらこの身のひきしまるおもいがするんだ。でも気がついたら、それ以上の疲れが私の肉体からすべてのしげきをとっていくんだけど。

「歌をうたわないのか」私は言った。

「そうね、でも」「マリソルは私の目を見て言ったんだ。

私は目をふせた。

別れのときは女の涙をみてはだめだよ、とくに好みの女ならなおさらね。

マリソルはうるんだ瞳をこちらにむけて言った。

「少し飲んでからにしましょう」

「もちろんさ」私は酒場のかたすみでマリソルに背中をむけたまま返事をした。

そして私は一度もマリソルを見なかったんだ。背中をむけたまま

で一度もね。

「最後にうたわせてよ」そしてマリソルの声が聞こえたんだ。

「もちろんだよ」私はそうつとマリソルを見た。

「この歌は愛する人にしかうたわないのよ」「マリソルはそう言った。

「うそつきだね君は」「私は白い煙草のけむりでステージの幕が
おりるようにロングピースに火をつけた。

「この歌が終わらないうちにお別れしましょう」「とマリソルは
悲しげに歌いだしたんだ。

「だって歌がおわったら私の泪であなたはきつと旅立てなくなるか
ら、この歌のおわらないうちに」「切ないメロディーにマリソル
の歌がつづいた。

「その白い煙草のけむりにまぎれて」「マリソルの声がながれる
泪に変わったように白いけむりの中を静かにフェードアウトしてい
った。

私がここにいたことは別にどってことないんです。
たんなる偶然なんですから。

だって。

もう私は港町のうらぶれた酒場の娘マリソルの歌が聞こえないと
ころに立っているんですから。

そろそろ行かなくては。

羽を休めすぎたら飛べなくなるから。

それにしても。

私はマリソルの悲しい歌を聞きすぎたみたいです。やけにけむり
が目にしみるんですよ。

ところで。

モンゴリーサを知ってますか？

ほら。

アンダルシアの山のふもとにあった小さなお店です。ランプがかかっていました。

そうでした。

気がついたら、ずい分話し込んでしまいましたね。

モンゴリーサの話はまたにしましょう。

「うそじゃありませんよ」

では、アディオス。

きまぐれなその一（後書き）

一応続きます。うそじゃありません。では、また会うときまで。

たそがれのその2

たそがれのその2

そうです。

ここはグアダルキビール川のほとりに面したセビリアの街です。
この前の道を左に曲がり、右に曲がり、さらに左に曲がり、右に
曲がればあの有名なスペイン広場です。

そして私はその路地のさらに奥まったところにいるんです。

なんのことはありません。

私には角を曲がれば何があるのか、わくわくするようなそんな路
地がお似合いなのです。

家の白い壁には沢山の薔薇の花が生けてあります。頭の上から薔
薇の花びらが落ちてくるなんて夢のようじゃありませんか。

薔薇の花瓶が落ちてきたら、どうするかですって？

きっとその花瓶には私に当てた可愛いあの子の手紙が入ってたり
しませんか？

その手紙を読む前に気を失ってしまっただけに何にもなりませんけど。

そうでした。

モンゴリーサの話をしなければいけませんね。

ほら、

アンダルシアの山のふもとのレストランのかかっていたお店です。

そう、

ランプで思い出しました。

モンゴリーサの話はクリスティーナの話をしてからにしましょう。

セビリアの裏通りの狭いアパートに住んでいたクリスティーナは

ランプを持っていなかったんだ。

あまり似合わない赤い服を着て好きでもないルージュの紅をさして、煙草をくわえてはむせてたちよつと変わったあの娘。まだ、二十歳こえたばかりの初心な女のくせに、妙に大人ぶってそれが小悪魔みたいだとちよつとした人気者。

暗くなったら寝るから明かりはいらないって、電気代を滞納したから電気止められちゃったって、真つ暗な部屋でランプもなく夜働いて、朝帰ってくる生活だからそれでいいんだって。

私がこの路地裏でクリスティーナに会ったのはまだ寒い夜明け前だった。

そこだけぼんやり水銀灯の明かりがともっていた。

偶然に白い壁にもたれて泣いている赤い服を着たクリスティーナを見て声をかけたんだ

「白い壁の赤い薔薇の少女」

クリスティーナはうつろな目を向けて私に問いかけてきたよ。無言でさ。

だから私は再び少しトーンを変えて言ったんだ。

「白い壁にうずくまる少女」

クリスティーナの濡れた瞳が長い黒髪の中で私を見つめたんだ。

「わたしのアパートの壁よ。わたしの」そういうクリスティーナは寂しげな表情をしていた。

「じゃ、わたしが部屋まで送ろう。寒いだろうから」

「あんた、優しいね」そういうなりわたしの足を力任せに蹴り付けたよ。

「言葉なんか みんな嘘！ それにあんたは女を捨てる目をしている まるで戦場の狂った兵士みたいだね」

「そんな事はしないさ。そしてここは戦場じゃない」

クリスティーナはきつい目を私にむけて、再び右足が飛んで来た。「私には同じようなものよ」

「さあ、部屋に帰って暖かいベッドでゆっくりおやすみ」私はクリスティーナの前に座って手を差し出したんだ。

その手をみてクリスティーナはにっこり微笑むと、まるでしおれた薔薇のように言ったよ。

「部屋に帰ってもランプもないの」

わたしは手を前に差し出したまま、しおれた薔薇を心で抱いていたよ。私は黒いカシミヤのコートをその肩にかけてあげたんだ。

「まだ私よりは幸せだよ。 私には部屋すらないのだから」

クリスティーナはチラと私を見て涙声でこんな話をしたんだ。

「でも、あなたには空があるわ」地面ばかりを見て、クリスティーナはコートの中で震えていたよ。

「私は小さい時、両親に捨てられたの。父の顔も母の声も覚えてないわ」私に会うまで、いつたい君はどんな人生を生きてきたんだ！心がそう叫んでいた。

「いつも下ばかり向いていたのよ、顔を上げる事が出来なかった。だから私には空がないの。今でもそう、いつも一人で友達もいない」そして暫くクリスティーナの身の上話を聞いていたんだよ。私の心は寒さに砕けそうだった。

「クリスティーナ！」「クリスティーナ！」突然、明かりのついたアパートの二階の窓から声がしたんだ。美しい青年がクリスティーナを呼んでいた。

「このコート暖かったわよ」クリスティーナは恥ずかしそうに、笑って立ち上がると私にコートを投げた。コートは私の足元に落ちた。

「クリスティーナ！早く来いよ。コーヒが冷める前に」青年の声が路地に響いて私の頭を麻痺させた。

「クリスティーナ 君が私生児って クリスティーナ 君の部屋のランプは」「私の声に振り向きもせず、クリスティーナはアパートの中に消えたんだ。そして心を砕くように窓が大きな音を立てて閉まった。

路地は私の頭にこそ花瓶は落ちてこなかったけど、わくわくさせてくれるんだよ。

私はコートを拾うとまだ残るクリスティーナのぬくもりを感じながらゆっくり歩き出したんだ。そしたら窓がゆっくり開いて白い花びらがヒラヒラと舞い落ちてきた。私が手を出した。その手の中に落ちて来たんだ。

それは花びらではなくクリスティーナからのなぐり書きの手紙だった。

クリスティーナの部屋にはランプがなかったんだ。

私は次の日、白い壁の前でクリスティーナが死んだことを知ったよ。

微笑えみながら、マッチ売りの少女みたいにマッチの燃えかすをいっぱい残してね。

私には白い壁にうずくまって、悲しそうに夜空を見ているクリスティーナが見えるんだよ。

「白い壁にうずくまる赤い薔薇の少女　寒いだろう」私はそう言いながらクリスティーナの肩に黒いコートをかけてそこを立ち去ったんだ。クリスティーナの心の中まで温めてくれるように願いがらさ。

君が見ている空にも、私が見ている空にも、あんなに星が光ってるんだから。

クリスティーナの手紙？

いつか必ずこの地を訪れる時、グアダルキビール川に流してあげよう。それまでにスペイン語が読めるようになればいいんだけど。

たそがれのその2（後書き）

読んで下さって有難うございます。もうしばらくお待ち下さい。

さりげなく完

モンゴリーサを知ってますか？

アンダルシアの山のふもとの小さな店です。

ランプがかかってました。

おそらく君なら気がつくはずですよ。

君は私が大学受験に失敗して、同じ大学に合格した高校時代の彼女との間が上手くいかなかったことを知っているだろう。

だって

私が予備校に通う電車の中で彼女が同じ大学の男と楽しそうに話をしているのを何度も見たんだよ。なんともね。

だから全てを忘れるために私は旅立ったんだ。その後を追うように君もアンダルシアに旅行にきたよね。そして毎日モンゴリーサで酒を飲みギターをかき鳴らし、夜が明けるのを忘れて語り合った。まだ随分若かったからね。

もし君がこれを読んでくれたら、そしてまだ私の事を覚えていたら、一緒に再び語り合わないか？

今度は缶ビールを片手に三丁目の児童公園のブランコにでも乗ってさ。

そう言えば

君は私の書いたグアダルキビール川の橋の上の短い物語を読んで大笑いをした事があったね。

どんな話しか覚えているかい？

ほら！

グアダルキビール川の橋の上で、私はその流れを見ながらぼんやりしてたんだ。突然、雨がふってきてさ、私は折り畳みの傘しか持っていないくて、うろろろしてたら雨が爽やかな風とともにスーと消えたんだよ。

私は前を見たんだ。

そしたら私の前には17、8歳くらいの女の子、そう、リリイビアンカが立っていたんだよ。

君はここであり得ないと大笑いさ！

リリイビアンカは私に微笑むとこう言ったんだ。私がセビリアの街を案内するわってさ。雨は気がついたら止んでいた。すっかり嬉しくなった私はリリイビアンカの言うままに案内してもらったんだ。

それは夢のようなひとときだった。

ある時は魔法の絨毯で空をとんで、ある時はリリイビアンカの自転車に乗って風を切って走った。あれがアルカサスよ、あれがセビリア大聖堂、あれがヒラルダの塔、あれがスペイン広場、あれが旧タバコ工場よって、君がそう言う度に私は、君がリリイビアンカ、君がリリイビアンカって。

楽しい時は瞬く間に過ぎて行っただよ。気がいたら元の橋の上に立っていたんだ。

この辺で君は呆れたように大きく首を振ってこれ以上無い程、笑い転げたもんだ。その時モンゴリーサのランプを君が足で蹴倒して危うく火事になりかけたんだよ。

覚えているかい？

それでも君はちゃんとその続きを読んできたんだ。

「もう行かなければ」ピアノ力が私の顔を見つめながらせつなそうに言ったよ。

「明日、会える？」私は別れるのが辛くてリリイビアンカにそう聞いたんだ。

「明日は無理」

「じゃ、その次は？」

「そのつぎも無理なの」

「今度、何時会える？」

「いつか必ず会えるわ。今、あなたが心の中に見つめている人に、あなたが会いさえすれば」

「私はリリイビアンカ、君をみているのに」

「そうかしら、そうだと嬉しいけど　でも、あなたは私を見ていなかった。　ほら、この橋の下にはグアダルキビール川がながれているわ。その先はきつとあなたの国につながっているのよ」

「明日もここに来るから」私は悲しくてそれしか言えなかった。

「もう12時を回ってしまう。必ずまた会えるわ。この橋の上でさよなら、あなた。アディオース、アミーゴ」

そして君は突然私の前から姿を消した。そう一瞬にして私の前からリリイビアンカが消えたんだ。魔法をかけたみたいになさ。

もうここでは君は決して笑わなかった。笑う事すら忘れる程に呆れ果ててたからね。

物語りはここで終わりだった。

君はほっとしたようにため息をついたね。それは作品がつまらないからじゃ無いのは分かっていたよ。人が書いたものに大笑いこそすれたため息をついたりはいらないからね。まあ、似たようなものだけだ。

私が煙草を吸おうとロングピースを口にくわえた時、モンゴリー
サのあの娘が、私にロンソンのライターをくれたんだよ。少し離れ
たところからかき鳴らされているギターにあわせて踊りながら私に
向かって放り投げたんだ。

でもそのライターは君がその細い目でウインクしながら受け取っ
たよね。悔しかったんだよ。ほんとうは。ため息を付きたいぐらい
にさ。

それもいい思い出だよ。

私が大事そうに一つの物語を胸に抱いて、その地を離れて故郷に
帰ったのはしばらく立ってからだった。

そして40年が過ぎた。

その後、私がどうなったかですか？

慎ましやかな、平凡な人生でした。それもそろそろ終わろうとし
ていますよ。

だから

私は君に問いかけてるんだよ。

あの物語の続きを読みたくないかって。もう一度君を大笑いさせ
てやりたいんだよ。

でも結局、あの続きは書けなかったんだ。

だから私は旅立ったんだよ。

その物語を完結させるために、40年の時を越えて、あの懐かし
いセビリアの街にさ。

さあ、続きを読んでくれないか。

グアダルキビール川の橋の上にて。

夕暮れの赤い光の中で私はぼんやりとも橋の欄干にもたれていたんだ。今度は一人じゃないよ。長年連れ添った女房の百合ゆりと二人でさ。

あの時書いた物語を　クリスティーナの手紙とともにグアダルキビール川に流すために。

私が40年前に書いた短い物語だよ。君がきつとここでありえないと笑うだろうな。でも私は待ったんだ。リリイビアンカが姿を現すのを、私は橋の上で待つてたんだ。

夕日が川面を染めて流れが止まって見える。

私の手がゆっくりと開いていく。

私の短い物語とクリスティーナの手紙がヒラヒラとグアダルキビール川の流れに落ちてゆく。

その時微かに風が流れた。

私は風の方へ目をやった。

橋の向こうで雨も降ってないのに鮮やか赤い傘がこっちを見てる。

「リリイ　」声にならなかった。

あの時のそのままの格好で橋のむこうに立っていたのはまぎれもなくリリイビアンカでした。

リイビアンカは私と私の横にいる百合に目をやって片目を瞑ってみせた。

「グラシアス、リイ」私は今度は大きな声で叫んでいたよ。そしてたらリイビアンカ、君は私達の横を赤い傘を持ってゆっくり歩きながら通り過ぎていったね。そして百合と交差したとき君はあの時と同じように突然消えたんだ。赤い傘を残して。

そして突然の雨。

驚いて上を見たら、爽やかな風とともに雨がスーと消えたんだよ。女房が私にその赤い傘を差しかけてくれた。

傘の上で雨粒が踊っていた。

私は言った。

グラナダに行こう。グラナダの洞窟でフラメンコを踊るカルメンを見るんだ。次はマラガに行くよ。歌の上手なマリソルって娘がいるんだ。ああ、クリステイーナは。

そしてさいごはモンゴリーサに行くよ。

さて

君はこの私の話を読んで大笑いしてくれただろうか？

それともあきれ果てて君の部屋のはだか電球を蹴倒してるだろうか。

もう一度だけ。

君に問いたい。

モンゴリーサを知ってますか？

そうです

この夕ぐれの中に私はたまたまいたのです。

つまり

林から前方の湖になげやりな目をむけてつつ立っているのも偶然のなせるわざなのです。

それは

今はこの夕ぐれと一体になっている私はあすはもうここには立っていないということです。

モンゴリーサを知ってますか？

ほら

アンダルシアの山のふもとにあった小さなお店です。

ランプがかかっていました。

日がな一日かきならしたギターラを、あのお店の片隅において私はひとり流れてきました。

他人の冗談にも笑えない今日この頃です。

でも

ロングピースに火をつけるとき、モンゴリーサのあの子が投げたロンソンを思い出すのです。

だから私は

さりげなく完（後書き）

何とか終わりました。読んでくださって有難う御座いました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0248f/>

モンゴリーサを知っていますか

2010年10月8日15時27分発行